

呉越～北宋の羅漢彫刻について

藤岡 穰 (FUJIOKA Yutaka) 大阪大学大学院文学研究科教授

主な著書・論文

- ・「鎌倉彫刻における宋代美術の受容」(『寧波の美術と海域交流』、中国書店、近刊)
- ・「仏像の受容と変容 インドから中国、東南アジアへ」(『歴史学のフロンティア 地域から問い直す国民国家史観』、大阪大学出版会、2008年)
- ・「仏像と本様—鎌倉時代前期の如来立像における宋仏画の受容を中心に」(『講座日本美術史2 形態の伝承』、東京大学出版会、2005年)

羅漢という主題をめぐって、本報告ではこれまであまり注目されてこなかった呉越～北宋の彫刻作品を紹介する。

杭州・西湖石窟には、烟霞洞や飛来峰などに十八羅漢、五百羅漢といった羅漢群像の作例が知られる。西湖の南西、南高峰南麓に位置する烟霞洞は、呉越文穆王(887-941)恭懿夫人の弟、呉延爽の造像とされる(『両浙金石志』)。門口の幅は4メートル程ながら、南北に30メートル余りも続く細長い洞窟である。洞門外には、東壁に楊柳観音立像、西壁に白衣観音立像の龕が対し、洞内には十八羅漢像や布袋像、浮き彫りの孔雀明王像などが表されている。烟霞洞にはこの他、楊柳観音の南側に菩提樹や龍などの浮き彫りが確認され、白衣観音の北側に開かれた龕にはもと八角七重塔と官人列像が刻まれていた。こうした烟霞洞の造像内容を確認しながら、羅漢の図様についても検討を加えたい。

西湖の北西、霊隠寺に隣り合う飛来峰は、霊鷲山の小峰が飛来したと評されるとおり、所々に空洞のある峻厳な石灰岩の岩山である。五代から明にいたる造像が知られるが、そのうち五代ないし北宋の造像が集中するのは東方の青林洞、玉乳洞と称される南北2つの空洞部周辺である。北宋・乾興元年(1022)の盧舎那仏会浮彫で著名な青林洞には、南・南東・北東・北の4ヶ所に開口部があるが、そのうち南口の奥、広順元年(951)銘の三聖像に隣り合って十八羅漢列像がある。また、東南口の右壁(西壁)にも咸平3~6(1000~03)年銘の羅漢群像がある。いずれも小像であり、表面がいささか摩滅・欠損しているものの、当期の彫刻様式を知るうえで貴重である。一方、玉乳洞は南に大きな開口部をもつ円形ホール状の洞窟で、洞内の壁面および北に伸びる甬道の東側壁の龕内に像高1m余の十八羅漢像を表す。また、北甬道の西側壁には僧伽和尚像(泗州大聖)と思われる被帽、定印の僧形坐像と二比丘立像の三尊を表した龕があり、東北に伸びる甬道の両側壁には天聖4年(1026)年銘の禅宗六祖とされる僧形像が表される。十八羅漢像は僧伽和尚像とともに六祖像と様式が近似し、北宋の造像とみられるが、その図様には烟霞洞像を継承しながらも新たな展開が認められる。

杭州以外の地域においても、北宋代には山東・済南市の霊巖寺千仏殿塑像、山西・長子県の崇慶寺塑像、広東・曲江の南華寺木像、江蘇・呉県の保聖寺影塑像など、華北、江南のいずれにおいても広く羅漢の雕塑像が現存している。これらに加え、大阪・観心寺や滋賀・千手寺、京都・善願寺に伝わる晩唐の僧形像、あるいは晩唐～五代の作とみられる広東・光孝寺の僧形像なども視野に入れつつ、雕塑像における羅漢の成立についても考察を試みたい。